

禅宗の見性思想とインド如来蔵思想

藤 田 正 浩

一 禅宗は、中国仏教の中でもとりわけ中国的色彩が強く、しかもそれは、六祖慧能に至ってインド的色彩をほぼ完全に払拭したと言われている。そしてその慧能の思想のうちで最も重要なものの一つに、見性を挙げることができる。慧能の思想が非常に中国的であることは間違いないとしても、それが仏教に基づくものである限り、インド仏教と無関係ではあり得ない。そしてこのことは、見性思想にも当て嵌まる。自性清浄心思想では心性という言葉が使われるが、この心性は、中国思想、たとえば孟子で本心と称されている概念などに近く、インド思想を待つまでもなく、中国においてすでに熟していたと考えられる。しかしこの中国思想の影響の程度は別として、見性の性がインド仏教の自性清浄心思想、如来蔵・仏性思想から出たものであることもまた確かである。そこで、インドに発した自性清浄心・如来蔵の思想が、どのような形で禅宗に吸収されていたのか、あるいはまた、慧能の見性思想が中国独自のものであると言われる理由、すなわ

ち、見性思想とインド如来蔵思想との相違はどのあたりにあるのか、ということについて考察するのが、本稿の主な目的である。^①なお資料としては、禅宗と関係が深いにもかかわらず、維摩経、華嚴経、起信論などには触れず、如来蔵を説くことを中心とする経に限った。

二 まずはじめに、見性思想のうちの性についてである。自性清浄心は始めに部派仏教の文献に現われ、その後大乘仏教において如来蔵思想に発展した。代表的な経は、皮切りとなつた如来蔵経をはじめ、不増不减経、勝鬘経の如来蔵三部経や、少し系統の異なる涅槃経などである。インドでは如来蔵という用語のほうが普通であるが、中国では仏性のほうが好まれた。その如来蔵・仏性に発展する概念が初期においては心に求められており、それが自性清浄心である。自性清浄心は「すべての人の心の本性は清浄であるが、客なる煩惱によって雑染されている」と規定され、インドでは、自性清浄と客塵煩惱とを並べて説く形が一般的である。自性清浄心は如

来蔵の語が現われても消えることはなく、心に重点が置かれたときには、如来蔵系経論においてもしばしば言及されている。如来蔵 (tathāgata-garha) と仏性 (buddha-dhātu) とは同義であると考えてよいが、中国では圧倒的に仏性の語が優勢であり、如来蔵はそれほど定着しなかった。そして仏性を初めて使った経は涅槃経であり、三部経には出ない³⁾。同じ如来蔵系経典でありながら、涅槃経が三部経と異なる点の一つに、三部経において自性清浄心から発展してきた如来蔵という概念を、涅槃経は仏性の語に変えたということが挙げられる。したがって見性思想を考える場合には、禅宗史における見仏性↓見性という流れを考え合わせると、経典としては、三部経よりもまず涅槃経を問題にしなければならぬと言えよう。また同じ涅槃経でも、曇無讖訳では原語が如来蔵 (tathāgata-garha) であるときでも仏性と訳している例が多く、法顕訳では忠実に如来性、如来之性と訳しているので、曇無讖訳のほうが影響が大きかったのであろう。

禅宗で重用された経典としては、従来は、達摩や慧可、あるいは神秀を中心とする北宗では楞伽経、慧能や神会の南宗では金剛経が問題とされてきた。しかし現在の研究では、柳田聖山教授や田中良昭教授などのごとく、少なくとも南宗に關しては涅槃経の影響の大きさが指摘されており、禅宗以外の中国如来蔵思想も涅槃経の影響が最も大きかったとされ

る。いずれにしても見性思想の性は、直接的には中国南地における涅槃経研究者の影響が考えられるであろうが、その源は、如来蔵系経典に關して言えば、涅槃経に求め得ると思う。性とは、インド的には自性清浄心・如来蔵、中国的には仏性を意味すると考えられる。ここでさらに buddha-dhātu をとりあげると、dhātu とは hetu (因) の義であると言われるごとく、インドで buddha-dhātu とは仏となる可能性を指す。如来蔵が在纏位の法身と規定されるように、仏性もまた因の状態である。ところが buddha-dhātu が仏性と漢訳されたことにより、慧能が使うときには意味の変化が見られる。すなわち、仏となる因や可能性ではなく仏たること (buddha-buddhatva) であると理解される点である。このような思想は、南方の涅槃経研究者などにも見られ、中国では珍しいこととは言えないが、インド如来蔵はもとより、道信、弘忍、神秀などとも異なり、慧能以降さらに発展し、馬祖になると如来蔵の範囲を逸脱してしまうのである。狭義のインド如来蔵では、本来は仏とまで主張することはなかった。

三 次に見性のうちの見について考えてみたい。性と同様見の場合も、如来蔵系経典中では涅槃経が有力である。如来蔵経、勝鬘経には、如来蔵を「見」という考え方はきわめて薄い。不増不減経には如来蔵を「見」という句があるが、見性思想とどれほどの関連があるかは疑問である。一般に三

部経では如来蔵に対する信が強調され、見や悟にはそれほど関心が払われていないようである。見は仏の境地であって、凡夫の関知する所ではないからであろう。一方涅槃經はどうかという点、見仏性の用例が非常に多く見られ、見性の用例もある。また、他の如来蔵系經典と同様信が強調されてはいるが、見仏性に至るための方便も強調されるのが涅槃經の特徴である。見の原語は、宝性論中の涅槃經の引用文によれば *paśyati* であり、涅槃經のチベット訳にも *paśyati* に相当する *mtshon ba* が使われており、ともに基本的には普通の見という意味である。しかし見仏性という術語では悟の意味に近く、漢訳や禅宗で使うときの見もまた同様の意味であると考えてよいであろう。涅槃經の見仏性思想における方便についてもう少し考えてみたい。三部経では、信が強調されるあまり、どうすれば如来蔵を知見できるのかという点がはつきりしていない。ただ仏のみが如実知見するのであって、凡夫にはひたすら信じよというばかりである。これに対し涅槃經では「要ず持戒に因りて、然して後乃ち見る」、「応当に方便を勤修して煩惱を断壊すべし」などと説き、見仏性に至る手段を示している。一般に大乘仏教では煩惱即菩提の考えが強い。煩惱を断ずるという考え方は小乗的であると非難されることが多く、このような面は涅槃經にもある。ところが涅槃經ではしばしばこのように煩惱を断ずることが勧められてい

るのである。このことの背景には客塵煩惱論が考えられる。心は本来清浄であるから、客なる煩惱を除去することによって、本来的な仏性が現われるという考え方である。最初に述べたごとく、「自性清浄、客塵煩惱」というセットフレーズは、如来蔵の基本思想であり、三部経をはじめ涅槃經や楞伽經などにも見られる。しかし三部経などでは、そのような如来蔵の構造や凡夫の理解を超えていることが示されるだけで、客塵煩惱を断じよとは言わず、方便は説かれない。したがって同じ如来蔵系經典でも、それまで見られなかった、見仏性や断煩惱の思想が涅槃經にあるということは重要であると考えられる。

次に禅宗における見性思想に移ると、見性思想は慧能に始まるとも言われている。しかし、すでに楞伽師資記の道信伝に見仏性、弘忍に帰される修心要論には見仏性の他に見性の語があり、広義の見性思想は慧能だけのものとは言えない。それでは、見性と言えば慧能とされるのはどういう意味であろうか。このことの理由の一つに、方便思想の有無という点を指摘し得ると思う。一般に言われるように、慧能においては本来清浄の側面が強調され、客なる煩惱に汚される以前の清浄なる仏性のみが問題とされている面が強い。煩惱は本来空であってそれほど議論されることはない。無念無相無住なども同じ系列にあると思われる。一方北宗においては、宗密

が払塵看浄説と非難しているように、煩惱が問題とされる面が強い。現実の迷の状態を大きくとりあげ、漸修によって本来の清浄なる状態に戻ることを主張する。したがって南宗の煩惱本来空や無念に對しては、除妄や離念が説かれる。そしてこのような断煩惱を重視する側面は、道信や弘忍の東山法門にも当て嵌まるのではないかと考えられる。インドの自性清浄心・如来藏思想では、萌芽のときから三部経や涅槃経、楞伽經に至るまで、つねに自性清浄と客塵煩惱とがセットで説かれていたことを考慮に入れると、東山法門や北宗はインド仏教の思想をより多く残している、と言うことができる。しかし、楞伽師資記によれば、道信以前に、信を強調する三部経においては凡夫に無縁であつた見仏性を、涅槃経を介して凡夫自身のものにしていく。

四 以上、禅宗における見性思想とインド如来藏思想とに關して考察を進めてきた。前者は後者の影響、仏性、見、煩惱論等を考えると、とくに涅槃経の影響を受けて成立したと考えられるが、仏性の意味、客塵煩惱論の取り扱い、如来に對する信の強調から凡夫自身の見への変化など、見性思想はインド如来藏思想には見られなかった点も多い。しかもこれらの違いは、間に道信、弘忍、神秀などを介して、慧能において顕著となる。このあたりに、慧能に至ってインド的要素が一掃されたと言われる理由の一つがあると考えられる。

禅宗の見性思想とインド如来藏思想（藤 田）

最後に、禅宗で重んじられたとされる經典中で触れなかったものについて一言したい。まず四卷楞伽と金剛經は、ともに現在の研究では、弘忍、神秀、慧能のいずれともそれほど密接な関係はないと言われている。これは見性思想にも妥当と思われる、四卷楞伽には如来藏説があるとはいへ仏性の用例はなく、したがって見性思想も見られない。金剛經に至ってはこれから見性思想が出たとは考え難い。次に円覚經と大仏頂首楞嚴經とは、成立の場所や時期を考慮に入れると当面の問題とは関係が薄い。以上の理由からこの四經には言及しなかった。

- 1 禅と如来藏については、増永靈鳳「初期禅宗史と心性の問題」『禅文化研究所紀要』三卷五号、西義雄「禅と如来藏思想に就いて」『禅文化研究所紀要』三号、小川弘貫『中国如来藏思想研究』などがある。本稿はインド如来藏思想については高崎直道『如来藏思想の形成』に多くを負っており、その他の禅関係の研究も大いに利用させていただいたが、資料の典拠とともに、紙数の関係でいち挙げられなかったことを深くお詫びします。
- 2 如来藏經仏駄跋陀羅訳には仏性の語があるが、チベット訳では ran bshin (prakti, 本性) であり、正確には仏性ではない。
- 3 ただし如来藏經には、自性清浄心、及びそれに類する用語はない。

（早稲田大学大学院）